

## 第六章 浮舟の物語 薫、浮舟生存を聞き知る

[第一段 新年、浮舟と尼君、和歌を詠み交す]

年も返りぬ(年が改まりました)。 \*年が明けても、雪深い小野尼庵であってみれば、すぐにどうという話の進展もなさそうだが、主だった登場人物の年齢だけは確かめて置く。何故か通説では、「かくて三年になりぬれど(こうして年が改まってみると、御方が二条院に興入れして三年目となっていたが)」(宿木卷八章一段)と本文にある明示にまで逆らって、二条院対の御方(宇治妹君)の出産を二条院入りの翌年と読み替えて、宿木卷末を薫殿 26 歳の夏四月としてあるが、本文にこそ従えば宿木卷末は薫殿 27 歳の夏四月なのであって、それは年が変わった今からは二年前の話になるので、この年で薫殿 29 歳、兵部卿宮 30 歳、常陸姫 23 歳、妹尼君 50 歳過ぎ、横川僧都 60 歳過ぎ、大尼君 80 歳過ぎ、といったあたりで、他はその都度見直したい。

春のしるしも見えず(春の兆しも見えず)、凍りわたれる水の音せぬさへ心細くて(氷が張り詰めた川からは水の音がしないことさえ心細くて)、「\*君にぞ惑ふ」とのたまひし人は(去年の舟遊びで「君にメロメロ」とのたまった兵部卿宮は)、心憂しと思ひ果てにたれど(軽い人だったとすっかり熱が冷めていたが)、なほその折などのことは忘れず(今でも姫はその時の青春は忘れません)。 \*「きみにぞまよふ」は注に<宇治川の対岸で過ごした匂宮との思い出。>とある。舟遊びはそんなに昔のことじゃない。去年の二月末あたりのことだ。宇治山荘の対岸の小家で常陸女は兵部卿宮と遊んだ。その日も雪の日で、その時の宮の歌が「峰の雪みぎはの氷踏み分けて君にぞ惑ふ道は惑はず」(和歌 51-10)なのだった。

「かきくらす野山の雪を眺めても、降りにしことぞ今日も悲しき」(和歌 53-23)

「白々と 雪がすべてを 遠ざける」(意訳 53-23)

\*注に<浮舟の独詠歌。「降り」「古り」懸詞。『完訳』は「空を暗くして降る野山の雪に、捨て切れぬ過去の執着の悲しみを自覚」と注す。>とある。

など、例の、慰めの手習を、行ひの隙にはしたまふ(などという詠歌を、いつものように、手慰みの習字で勤行の合間には書きなさいます)。「我世になくて年隔たりぬるを(私が忽然と姿を消して年を越したが)、思ひ出づる人もあらむかし(私のことを思い出す人もいるだろう)」など、思ひ出づる時も多かり(と以前の暮らしを思い出す時も多くなりました)。

若菜をおろそかなる籠に入れて(若菜を粗末な籠に入れて)、人の持て来たりけるを(村人が尼庵に持って来たのを)、尼君見て(尼君は見て)、

「山里の雪間の若菜摘みはやし、なほ生ひ先の頼まるるかな」(和歌 53-24)

「七草で 商売繁盛 祈りたい」(意訳 53-24)

\*「若菜摘み榮やし」は<七草粥で長寿を祝う>ということらしい。「生ひ先」は<若い芽が伸び行く先→行く末・将来>だから、「なほ」で<それにつけても>と「若菜」に尼姫の「生ひ先=将来」を引っ掛ける。「頼む」は<期待する>。「頼まるる」は<頼まれるもの=期待される所=安泰であってほしい>。

とて、\*こなたにたてまつれたまへりければ(と尼姫に差し上げなされたので)、 \*「こなた」は<姫(の部屋)>のようだが、少将尼の目線での語りという意味だろうか。しかし、あえて<少将尼をして>と明示したものか、判断に困る。どうも、この「こなた」という言い方が、私は気に入らない。

「雪深き野辺の若菜も、今よりは君がためにぞ年も摘むべき」(和歌 53-25)

「これからは 山の若菜に 年を摘む」(意識 53-25)

\*注に<浮舟の返歌。「雪」「若菜」「摘む」の語句を用いて返す。『評釈』は「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣でに雪は降りつつ」(古今集春上、二一、光孝天皇)を指摘。>とある。この歌詠みの妙は、如何にもこの引歌を下敷きにしての「今よりは」と戯れた所にありそうに見える。ところで、この引歌は百人一首にある有名な歌らしく、非常に多くのウェブページがヒットする。が、不思議と、とはいえカルタ取りに興じているのなら当然なのかもしれないが、この源氏物語のこの場面で引かれていることについては、触れているページは少しあったが、私が雑観した限りでは、この常陸女の歌詠みから引歌の歌意を探るようなページは無かった。すべてのサイトを一纏めに言う心算はないが、多くは「あなたが元気になるように新春の野に出て七草を摘む私の袖には雪が降り掛かる」という歌筋を優しい風情と見たり、または<袖を濡らす→病苦を思い遣って泣く>くらいの悲痛さに見ているようだ。いや、その歌筋も、その味わいも、その通りだろうと私も思う。ただ、「衣手(ころもで)」は<袖>だから、「裾(ゆき、袖の長さ)」と「振る」は縁語で、それが「雪」と「降る」に洒落語用されていて、「春の野に出でて」する縁起行事の目出度い気分の生きる楽しさを表現しているようで、その陽気さが病人には一番の薬かもしれないと微笑ましく思えるところが心憎かったりするのだろう。で、この歌は詞書に「仁和のみかど、みこにおましましける時に人に若菜たまひける御うた」とあって、光孝天皇が即位する以前に誰かに七草を与えなされたときの御歌、ということらしいので、「奉り給ふ」ほどの相手ではなさそうだから、「君」は天皇や妃ではなく<愛しい女>あたりに見える。で、是は丸っきりの見間違いかもしれないが、私には光孝天皇の親王時代が兵部卿宮に重なって見える。だから、常陸女が「今よりは」と言う時に、宮と遊んだ時の自分をさっぱり振り切って、今後は尼君への恩返しに生きる、という気持ちを込めているように聞こえる。それに、そうであれば「年を積む」の掛詞も重みが増して、詠み手の落ち着きが良さそうだ。尤も、それは常陸女の内心意であって、傍目には洒落語用の軽さに聞こえたのだろうが、その両面を読者に示せるのが作者の狙い目であるようにさえ見える。穿ち過ぎかもしれないが、穿ち甲斐のある歌だ。

とあるを(と姫の返歌があるのを)、「さぞ思すらむ(そういうお覚悟らしい)」とあはれなるにも(と感じ入るにも)、「見るかひあるべき御さまと思はましかば(この人が御世話し甲斐のある姫君姿であったなら)」と(と尼君は姫の尼僧姿に)、まめやかにうち泣いたまふ(つくづく惜しいとつい泣かれなさいます)。

\*閨のつま近き紅梅の色も香も変はらぬを(姫の部屋先の紅梅の色も香りも俗世に居た去年までと変わらないのを)、「\*春や昔の」と(「昔や春の」と古今集歌にも懐古された情緒に

重ねて)、異花よりもこれに心寄せのあるは(他の花よりもこの梅に心引かれるのは)、\*飽かざりし匂ひのしみにけるにや(いつまでも兵部卿宮の焚き香の匂いが忘れられないからでしょうか)。 \*「ねや」は此処では<寢室>というよりは<女性の部屋=尼姫の居間>のことらしい。尤も、出家した姫は小部屋を自室に宛てがわれて寝起きして、仏間で読経するような生活だったのかもしれないが。 \*「はるやむかしの」は注に<『源氏釈』は「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(古今集恋五、七四七、在原業平・伊勢物語、四段)を指摘。>とある。早速に「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、この古今集歌は、ほぼ伊勢物語四段の話そのままの長い詞書があるようで、詠み手が「在原業平」と明示されているだけに、歌集の方が実話っぽさが増す感じだ。が、いくつかの伊勢物語四段の解説ページを雑観すれば、逆に、それらしい実相に基づいて面白い話に仕立てられた、という可能性も高い気がする。ともあれ、詞書には「またの年の春、梅の花さかりに月のおもしろかりける夜、去年(こぞ)を恋ひて」とあって、去年の春の楽しかった日を懐かしむ、ということでは、この場面に引かれるのは相応しそうだ。が、歌筋は「今の春の月夜の寂しさに自分だけが置き去りにされている」というのだから、常陸姫は立ち去った方の女の立場になりそうだ。 \*「あかざりしにほひのしみにけるにや」は注に<『異本紫明抄』は「飽かざりし君が匂ひの恋しさに梅の花をぞ今朝は折りつる」(拾遺集雑春、一〇〇五、具平親王)を指摘。『湖月抄』は「地」と指摘。『集成』は「はかない逢瀬だった匂宮のことが忘れられないのだろうか。浮舟の心事を付度する体の草子地」と注す。>とある。

\*後夜に闍伽奉らせたまふ(後夜のお勤めで尼姫は仏前に功德水をお供えなさいます)。 \*下臈の尼のすこし若きがある(下働きの尼の少し若い女房がいたので)、召し出でて花折らすれば(呼び出して庭のその紅梅の枝を手折らせると)、\*かことがましく散るに(殺生を恨めしように花がこぼれて)、いとど匂ひ来れば(いっそう匂い立ったので、姫は一句詠みます)、 \*「後夜(ごや)」は<六時の一。寅(とら)の刻。夜半から夜明け前のころ。現在の午前4時ごろ。また、その時に行う勤行(ごんぎょう)。夜明け前の勤行。>と大辞泉にある。「六時(ろくじ)」は<『仏』一昼夜を六分していう語。すなわち、晨朝(じんじょう)・日中・日没(にちもつ)・初夜・中夜・後夜(ごや)のこと。この時間ごとに懺悔(ざんげ)・念仏などの勤めをする修行が行われた>と大辞林にある。「闍伽(あか)」は<仏前に備える功德水>とのこと。 \*「下臈(げらふ)」はもともと<修行年数の浅い僧。>のことだったようだが、それなら常陸女こそが下臈だが、此処では<身分の低い者>のことらしい。仏門も階級社会は俗世のままらしい。当然だ。実生活は布施で成り立つのだから。それと、老婆ばかりかと思ったが、コモキという童女もいるし、此処で「少し若き」も登場する。勿論、都の屋敷に比べれば圧倒的にこじんまりはしているだろうが、この小野尼庵も紛れなく貴族の住居ではあるらしい。 \*「かことがまし」は<恨みがましい>。下歌でもありそうな言い回しだが、注釈は無い。が、下の歌詠みの前フリではあるのだろう。ハズレかもしれないが、枝折りも<殺生>で戒めに障るのではないか。

「袖触れし人こそ見えね、花の香のそれかと匂ふ春のあけぼの」(和歌 53-26)

「あけぼのに 梅の香だけが 匂い立つ」(意訳 53-26)

\*注に<浮舟の独詠歌。『全書』は「色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖触れし宿の梅ぞも」(古今集春上、三三、読人しらず)を指摘。匂宮を思い出す。>とある。「誰が袖触れし」と言ったって、此処では下女が手

折ったのだが、「色よりも香こそあはれ」なのだから、女を閉じれば匂宮の顔が思い出される常陸女なのだろう。「あけぼの」は空が灰かに白んだ夜明け前。

## [第二段 大尼君の孫、紀伊守、山荘に来訪]

\*大尼君の孫の紀伊守なりける、このころ上りて来たり(大尼君の孫の紀伊守なる者が、最近任地から上京していて小野尼庵に遣って来ました)。三十ばかりにて(三十歳くらいで)、容貌きよげに誇りかなるさましたり(立派な形をして自信たっぷりの態度をしていました)。\*「おほあまぎみのまごのきいのかみ」は横川僧都や妹尼君の甥に当たるのだろうが、どういう兄弟姉妹の子なのかは分からない。今を時向く頭領だ。

「何ごとか、去年、一昨年(何かありましたか、この一、二年)」

など問ふに(などと訊きますが)、ほけほけしきさまなれば(大尼君は惚けている様子なので)、\*こなたに来て(妹尼君や尼姫が居る部屋の方に来て)、\*「こなた」は注に<妹尼の部屋。浮舟も同居。>とある。同居、というよりはこの場面では同席している、ということかと思うが、その辺の生活実態が説明不足で、こういう言い方はとても分かり難い。此处では、紀伊守は妹尼君に会いに来るのであって、「こなた」を<常陸女の居る方>と言い換えたのでは、紀伊守の行動の客観的な意味を正しく示さない。いや、それどころか、紀伊守は常陸女の存在を恐らくは知らないのだから、紀伊守の移動を説明する時に、この時点で常陸女が対象体であるかに見えるような紛らわしい言い方は、現代語文では全く不適當だ。が、本文にこう書かれている以上は、よく分からない生活実態をぼんやりと想定して、それなりに言い換える他は無い。どうも、この「こなた」の語用は気に入らない。

「いとこよなくこそ、ひがみたまひにけれ(祖母上はずいぶん分からなくお成りですね)。あはれにもはべるかな(寂しい限りです)。残りなき御さまを(残り少ない御老後を)、見たてまつること難くて(御世話も出来ず)、遠きほどに年月を過ぐしはべるよ(遠い国で年月を過ごしました)。親たちものしたまはで後は(両親亡き後は)、一所をこそ(祖母上お一人を)、御代はりに思ひきこえはべりつれ(親代わりに思い申して参りましたが)。\*常陸の北の方は(常陸介の北の方は)、訪れきこえたまふや(手紙を遣こしなさいますか)」\*「ひたちのきたのかた」は注に<紀伊守の妹、常陸介の妻となっている。浮舟の継父の常陸介とは別人。>とある。現役なのだろうか。常陸という縁の近さに、一読者の私は当の常陸女ならずとドキッとす。

と言ふは(と紀伊守が妹尼君に話すのは)、\*いもうとなるべし(妹の事のように)。\*「妹なるべし」は注に<浮舟の耳を通しての叙述。>とある。ヒタチ、と聞いて胸騒ぎする常陸女の心情を読者に推量させる書き方なのだろう。が、折角の筆致が舞台説明が不十分なために、現にこのように注釈が必要ほど分かり難い。

「年月に添へては(歳を取ると)、つれづれにあはれなることのみまさりてなむ(どうしてもはっきりしなくなる一方です)。常陸は(常陸からは)、久しう訪れきこえたまはざめり(しばらく手紙を頂いておりません)。\*え待ちつけたまふまじきさまになむ見えたまふ(母君は

北の方が帰京なさるまで待ち切れなさらないように見えなさいます)」 \*「え待ちつけたまふ」の主語は大尼君らしい。注には<『完訳』は「守の北の方の帰京を待てずに母尼が死ぬのではないかと危ぶむ」と注す。>とある。

とのたまふに(と尼君がお応えなさると)、「わが親の名(常陸の北の方とは、自分の母親と同じ名前だ)」と、あいなく耳止まれるに(と尼姫は別人ながら耳に付くが)、また言ふやう(さらに紀伊守が言うことには)、

「まかり上りて日ごろになりはべりぬるを(私は上京して数日になります)、\*公事のいとしげく(公務が忙しく)、むつかしうのみはべるにかかづらひてなむ(面倒なことばかりに追われておりました)、昨日もさぶらはむと思ひたまへしを(昨日の内にも此方に伺う心算でしたが)、右大将殿の宇治におはせし御供に仕うまつりて(右大将殿が宇治へお出かけになる御供に仕え申しましたが)、故八の宮の住みたまひし所におはして(右大将殿は故八宮のお住まいだった所にいらっしゃって)、日暮らしたまひし(終日お過ごしでした)。 \*「公事」は「くじ」ではなく「おほやけごと」と読みがある。任期明けか中間報告かは分からないが、正に公務で紀伊守は上京したに違いない。

故宮の御女に通ひたまひしを(大将殿は故宮の御息女にお通いだったが)、まづ一所は一年亡せたまひにき(先にそのお一人は先年亡くなっていたらっしゃいました)。その御おとうと(その御妹を)、また忍びて据ゑたてまつりたまへりけるを(また目立たぬようにその宇治の宮邸に住ませ申しなさっていたのが)、去年の春(こぞのはる)また亡せたまひにければ(またお亡くなりになったので)、その御果てのわざせさせたまはむこと(その御一周忌法要をなさることについて)、かの寺の\*律師になむ(菩提寺の律師なる者に)、さるべきことのたまはせて(打ち合わせなさせて)、\*なにがしも(それがしも)、かの女の装束一領(かのをんなのさうぞくひとくんだり、お布施の女装束一式を)、調じはべるべきを(調製しなければなりません)、せさせたまひてむや(御布施に相応しいものを、此方でお作り頂けませんか)。織らすべきものは(必要な材料は)、急ぎせさせはべりなむ(用意いたします)」 \*「律師(りっし)」は僧都に次ぐ僧官位とのことで、山寺の阿闍梨は出世に興味が無いとは言っていたが、現実に世間の対応は叙位の前後では違って来て、それらしい権威を身に纏うのだろう。 \*「なにがし」は注に<自称、紀伊守>とある。

と言ふを聞くに(と言うのを聞けば)、いかでかあはれならざらむ(尼姫はどうして平静でいられましょう)。「\*人やあやしと見む(その動揺ぶりを、誰か怪しむといけない)」とつつましく(と隠そうとして)、奥に向ひてあたまへり(尼姫は後ろを向いて座っていらっしゃいました)。 \*「人やあやしと見む」の「人」は尼君や少将尼だろうか。紀伊守ではないだろう。常陸女は尼君と同席しているようだが、紀伊守とは御簾で仕切られていて姿は見えないはずだ。紀伊守が特に好色でないにしても、老人ばかりのこの尼庵に若い尼君の姿を見れば、その素性は必ず訊くはずだ。というか、尼姫が迂闊に男の前に姿を見せる訳もない。

尼君(尼君が)、

「かの\*聖の親王の御女は(あの聖人暮らしをなさった故八宮の御息女は)、二人と聞きしを(二人と聞きましたが)、兵部卿宮の北の方は(御息女がお二人亡くなったとすると、兵部卿宮の二条院の御方は)、いづれぞ(一体、誰なんですか)」 \*「ひじりのみこ」は尼僧として山寺に隠棲した故八宮を認識し、敬った表現だろうか。八宮の逝去は薫殿 23 歳の八月頃だったので、今からは五年半前の事になる。一般には忘れられた存在だったかと思う。

とのたまへば(と仰ると)、

「この大将殿の御後の(今申した大将殿の後の方の女は)、劣り腹なるべし(妾腹子のようなです)。ことことうももてなしたまはざりけるを(正式に妻に迎えなされた人ではないが)、いみじう悲しびたまふなり(殿は非常にお悲しみになっているのです)。初めのはた(初めの方の時はまた)、いみじかりき(大変で)、ほとほと出家もしたまひつべかりきかし(ほとんど出家もなさりそうなお悲しみでした)」

など語る(と紀伊守は話します)。

[第三段 浮舟、薫の噂など漏れ聞く]

「\*かのわたりの親しき人なりけり(この御孫殿は薫大将殿に近い人なのだ)」と見るにも(と分かると)、さすが恐ろし(尼姫はさすがに用心されるのでした)。 \*「かのわたり」は<大将家>。注には<浮舟の心中。紀伊守を薫の家来と知る。>とある。

「あやしく(不思議と)、やうのものと(同様に)、かしこにてしも亡せたまひけること(同じ所で早世なされたわけです)。昨日も、いと不便にはべりしかな(昨日もとても痛々しくございました)。川近き所にて、水をのぞきたまひて(宇治川の近くで流れを覗き込みなされて)、いみじう泣きたまひき(とてもお泣きなさっていました)。上にのぼりたまひて(家にお上がりになると)、柱に書きつけたまひし(柱に書き付けなされた御歌は)、

『見し人は影も止まらぬ水の上に、落ち添ふ涙いとどせきあへず』(和歌 53-27)

『止まらずに 影も涙も 流れ去る』(意識 53-27)

\*注に<薫の独詠歌。「涙」に「波」を響かす。「影」「水」「波」縁語。>とある。渋谷訳文に<あの人は跡形もとどめず、身を投げたその川の面に、いっしょに落ちるわたしの涙がますます止めがたいことよ>とある。「影も止まらぬ」は左様に二重読みするものらしい。上句と下句の末尾を、それぞれ一字づつ余らせたのは「せきあへず」に洒落ているのだろうか。まあ、此処で薫殿の歌を聞くととは思わなかったのは、私より常陸女なのだろう。

となむはべりし(とのように御座いました)。言に表はしてのたまふことは少なけれど(言葉に表して仰ることは少ないのですが)、ただ、けしきには(しかし、ご様子は)、いとあはれなる御さまになむ見えたまひし(とても悲しんでいらっしゃるようにお見えでした)。

\*女は(三条邸の女たちが)、いみじくめでたてまつりぬべくなむ(非常に愛しく思い申ししていたのも当然のように)、若くはべりし時より(私は若い時から)、優におはしますと見たてまつりしみにしかば(殿は優れた御方でいらっしゃると拝し申ししていましたので)、\*世の中の一の所も(当代一の権力者である大臣殿も)、何とも思ひはべらず(主と思わず)、ただ、この殿を頼みきこえてなむ(ただこの殿をお頼み申して)、過ぐしはべりぬる(宮仕えをして来たのです)」 \*「をんな」は、匂兵部卿卷二章五段に「思ひ寄れる人は、誘はれつつ、三条の宮に参り集まるはあまたあり」とあった<三条宮邸の女たち>なのだろう。 \*「よのなかのいちのところ」は注に<当代の最高権力者。夕霧をさすか。>とある。叔母である尼君を身内と油断しての物言いなのだろうが、この人の立場では、ほぼ任命権者とも思える大臣を軽々しく言うのは、表沙汰になれば冗談では済まされない話に聞こえる。この口の軽さが下の文に繋がるのだろう。

と語るに(と紀伊守が軽口を言うので)、「ことに深き心もなげなるかやうの人だに(あまり慎重そうでもないこのような人でさえ)、御ありさまは見知りにけり(殿の御立派さは分かっているらしい)」と思ふ(と尼姫は思います)。

尼君(尼君が)、

「光君と聞こえけむ故院の御ありさまには(光る君と申し上げた故院の御姿には)、並びたまはじとおぼゆるを(適いなされますまいと思えますが)、ただ今の世に(現下では)、この御族ぞめでられたまふなる(この御一族がお盛んのようなのですね)。右の大殿と(みぎのおほとのと、右大臣と言い、たいそうな御権勢で)」

とのたまへば(と仰ると)、

「それは(それはもう)、容貌もいとうるはしうけうらに(顔立ちも整って立派で)、\*宿徳にて(貫禄があつて)、際ことなるさまぞしたまへる(別格でいらっしゃいます)。兵部卿宮ぞ(その娘婿でいらっしゃる兵部卿宮がまた)、いといみじうおはするや(実に優美でいらっしゃいますよ)。女にて馴れ仕うまつらばや(女房として身近にお仕え申したい)、となむおぼえはべる(とのように思えるほどです)」 \*「宿徳」は「すくとく」とローマ字読みがある。古語辞典には「しうとく」で<威厳があり、重々しいこと。>とある。

など(と紀伊守は)、教へたらむやうに言ひ続く(世間知らずの叔母上に教え込むように話し続けます)。あはれにもをかしくも聞くに(その紀伊守の話感慨深くも興味深くも聞くに付け)、身の上もこの世のこととおぼえず(尼姫は自分の事なのに本当の話に思えず、全部作り話に聞こえます)。\*とどこほることなく語りおきて出でぬ(紀伊守は用件を話し終えて

帰りました)。 \*「滞ること無く語り置きて」とあるが、紀伊守の主眼は薫大将が催す宇治の女の一周忌法要に必要な布施の女衣装を尼君に作って貰うことだったようで、後はその事についての雑談だったので。

[第四段 浮舟、尼君と語り交す]

「忘れたまはぬに\*こそは(大将殿は私をお忘れではないのだから、生きていることをお知らせ申すべきだろうか)」とあはれに思ふにも(と有難く思うにつけても)、いとど母君の御心のうち推し量られるれど(殿以上にお喜び頂けるかと母君の御心の内が推し量られたが)、なかなか言ふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむは(却って期待に背いた尼僧姿をお見せ申すのは)、なほつつましくぞありける(やはり気が引けるのでした)。 \*「こそは」は言い差した。上の「忘れたまはぬに」の「に」は条件項を示す格助詞で、「こそ」の係助詞はその条件を強調するというよりは、その条件を受けて強く思う事があることを示していて、此処では<そういうことなのだから>という理由説明の語用となって、下に常陸女自身が思うことが続く文型だが、それは本人が思う事なので、本人には客観認識の必要はない。が、読者にとっては<他人事>なので、省かれた下文の文意を確かめないと納まらない。が、その文意は下文に明示されている。即ち、「なかなか言ふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむはなほつつまし」とあるので、言い差しの下は<生存を知らせても良い>くらいの気持ちだ。

かの人の言ひつけしことどもを(あの紀伊守が言い付けた布施用の生地を)、染め急ぐを見るにつけても(尼女房たちが染めて用意するのを見るにつけても)、あやしうめづらかなる心地すれど(生きて自分の一周忌法要の為とは、変で不思議な気がしたが)、かけても言ひ出でられず(その法要の本人が自分だとは、とても言い出せません)。

裁ち縫ひなどするを(尼君は着物の仕立て縫いをしていて)、

「これ\*御覧じ入れよ(此処の縫い仕事をやってくれませんか)。ものをいとうつくしう\*ひねらせたまへば(あなたは端の始末をととても綺麗に仕上げなされるから)」 \*「御覧じ入る」は「見入る」の敬語だが、「見入る」は<注視する>の他に<しっかり面倒を見る→仕事をする>という語用があるらしい。 \*「ひねらせたまへば」は注に<『完訳』は「反物の縁を折り曲げてくけずにおくこと」と注す。>とある。よく分からないが、「捻る(ひねる)」は<つまむ。ねじる。>みたいな語感だから、「ひねらす」は<端の始末を綺麗に整えさせる>みたいなことかもしれない。

とて(と言って)、小桂の単衣たてまつるを(姫に小桂の単衣をお渡し申すのを)、うたておぼゆれば(姫は自分の一周忌法要の為の仕立てとはさすがに嫌気して)、「心地悪し(気分が悪いので)」とて、手も触れず臥したまへり(と言って、その着物には手も触れずに伏せりなさいました)。尼君、急ぐことをうち捨てて(尼君は仕立て仕事も放り出して)、「いかが思さる(どういうお加減ですか)」など思ひ乱れたまふ(などと心配なさいます)。

紅に桜の織物の桂重ねて(伏せる姫の上に紅い着物と桜色の織物の桂を重ねて掛けて)、



「御前には(お前様には)、かかるをこそ奉らすべけれ(こういう着物をお着せ申したい)。あさましき墨染なりや(張り合いの無い法衣姿だこと)」

と言ふ\*人あり(と言う女房も居ます)。 \*「人」は少将尼か左衛門か。取って付けたような登場で、如何にも次の歌の前フリ。

「尼衣変はれる身にや、ありし世の形見に袖をかけて偲ばむ」(和歌 53-28)

「綾織りは 要らぬ御世話の 尼衣」(意識 53-28)

\*「変はれる身にや」は反語表現で<出家した身なのだから不要だ>という言い方。「形見」は<名残り=未練>。「片身」は<独り寝の片袖>。詠み方は「ころも」「片身」「袖」の縁語尽くし。

と書いて(と尼姫は書いて)、「\*いとほしく(申し訳ないが)、\*亡くもなりなむ後に(私が本当に死んだ後で)、物の隠れなき世なりければ(事情は隠しきれないこの世の中なので)、聞きあはせなどして(尼君は事実を聞き合わせて)、疎ましきまでに隠しけるなどや思はむ(私が情けないほど素性を隠していたものだというように思うだろう)」など、さまざま思ひつつ(などと、やはり打ち明けられないまま、いろいろと考えて)、 \*「いとほし」は常陸女が尼君に<申し訳ない、相済まない>という気持ちを言ったもの、と取って置く。というのは、下文の「隠しけるなどや思はむ」の「や」は、実際に此处では常陸女は事実を隠す心算のようだから、反語や疑問の係助詞語用では文意が立たず、「思はむ」という未来予測に於いて<というように>と抽象対象を示す副詞語用と取るしかないので、その尼君が「思はむ」ことに対する謝意以外には語意が成立しない、ように私には見える。 \*「なくもなりなむ」は内心文とは言え、生き死にのことで敬語遣いが無いのは自分の事か一般論かの何れかだろう。で、此处は正に常陸女自身の事情なので、この「も」の強調は<本当に>という副詞語用かと思う。

「過ぎにし方のことは(昔のことは)、絶えて忘れはべりにしを(すっかり忘れてしまいました)、\*かやうなることを思し急ぐにつけてこそ(このように尼僧のみなさまが御布施用の衣服を仕立てていらっしゃるのが)、ほのかにあはれなれ(少し悲しく)」 \*「かやうなること」は少将尼らが姫に掛けた作りかけの装束だろうが、もしかすると、紀伊守が言った「かの女の装束一領」(二段)は布施用の装束とは言え<立派な晴れ着>なのかもしれない。高価な衣服の方が使い手のある布施になるか。しかし、だとしたら、威勢の良い頭領が何も尼庵に衣装の仕立てを頼むというのは、余りにも話の都合を優先した設定に思える。が、それでも、まあ綺麗な女装束の用意だとしても、この「かやう」は<尼僧が世俗の女房のように布施の用意をしていること>と読んで置く。

と\*おほどかにのたまふ(と曖昧に仰います)。 \*「おほどか」は<おっとり>と古語辞典にあるが、注には<心の動揺を見透かされないように。>とあるので、此处では<曖昧に>と読んで置く。

「さりとも(そうは言っても)、思し出づることは多からむを(思い出しなされることは多いでしょうに)、尽きせず隔てたまふこそ心憂けれ(いつまでもお隠しになるのは情けない)。身には(私は)、かかる世の常の色あひなど(このような世俗の服の色合いなど)、久しく忘れ

にければ(久しく離れて忘れていきますので)、なほなほしくはべるにつけても(型通りのものしか作れません)、昔の人あらましかば(亡き娘が生きていたら)、など思ひ出ではべる(とは思ひ出されます)。しか扱ひきこえたまひけむ人(私が娘にしたのと同じようにあなたを御世話なされた人は)、世におはすらむ(生きていらっしゃるのですか)。

やがて(他ならぬ)、亡くなして見はべりしだに(娘を亡くした私でさえ)、なほいづこにあらむ(まだ何処かに生きてる)、そことだに尋ね聞かまほしくおぼえはべるを(其処を探し出したいと思ひますのに)、行方知らで(このように生きていらっしゃるあなたの行方が分からないままで)、思ひきこえたまふ人びとはべるらむかし(探しておいでの方が居るに違いありません)」

とのたまへば(と尼君が仰ると)、

「見しほどまでは(以前の暮らしでは)、一人はものしたまひき(片親はお出ででした)。この月ごろ亡せやしたまひぬらむ(この数か月の内に亡くなったかも知れませんが)」

とて(と姫は言つて)、涙の落つるを紛らはして(涙が落ちるのをごまかして)、

「なかなか思ひ出づるにつけて(却つて思い出すにつけ)、うたてはべればこそ(辛くなりますので)、え聞こえ出でね(今までは、お話し申せませんでした)。隔ては\*何ごとにか残しはべらむ(隠し立てなど何も残っておりません)」 \*「なにごとにか」は反語表現だが、常陸女はほとんど何も打ち明けていないので、大ウソである。

と、言少なにのたまひなしつ(と言葉少なに言い繕いなさいました)。

[第五段 薫、明石中宮のもとに参上]

大将は(薫大将は)、\*この果てのわざなどせさせたまひて(この常陸女の一周忌法要を済ませなさせて)、「はかなくて、止みぬるかな(あっけなく終わったものだ)」とあはれに思す(と感慨深くお思いになります)。 \*「このはてのわざ」は注に<浮舟の一周忌。三月末。>とある。この文で時間も舞台も一気に飛ぶ。

\*かの常陸の子どもは(前常陸守の北の方に後見を約束なされた常陸女の異父弟たちについて)、かうぶりしたりしは(元服した者は)、蔵人になして(蔵人仲間に入れてやり)、\*わが御司の将監になしなど(右近衛府の将監に取り立ててやって)、勞りたまひけり(面倒を見ていらっしゃいました)。「童なるが(元服前の子は)、中にきよげなるをば(中に可愛らしい者が居れば)、近く使ひ馴らさむ(側で小間使いさせよう)」とぞ思したりける(とのお思いになっていました)。 \*「かのひたちのこども」は注に<浮舟の継父の子供。>とある。大将が常陸女の母君を哀れんで世話を約束した異父弟たちだ。 \*「わがおおんつかさのぞう」は注に<右近衛府の将監(三等官)。>とある。「将監」は「ぞう」と読みがある。「ぞう」は「じょう(判官)」の音便らしい。「判

官」は、「かみ(長官、近衛府では大将)」、「すけ(次官、近衛府では中将・少将)」、「じょう(判官、近衛府では将監)」、「さくわん(佐官、近衛府では将曹)」とある四等官制に於ける三等官、とのこと。また、「将監」は「しゅうげん」という漢字読みの言い方もあるらしい。ややこしいし、どうでも良いようなことに見えるが、それぞれに事情や歴史があつての事で、当事者にとっては重要な事柄だったのである。部外者が是らを一纏めに扱うのは自由だが、組織が所定の思惑通り機能するためには、構成する個々人が実際の間関係の中で意欲を以て働く事が必要で、歴史はその拘りの結果だということは知るべきなのだろう。

雨など降りてしめやかなる夜(雨降りの静かな夜に)、後の宮に参りたまへり(大将殿は姉君である明石中宮をお見舞いなさいました)。御前のどやかなる日にて(皇后のお部屋には人も少ない穏やかな日だったので)、御物語など聞こえたまふついでに(親しくお話し申しなさる内に)、

「あやしき山里に(辺鄙な山里に)、年ごろまかり通ひ見たまへしを(数年来通つて女を世話してましたのを)、人の誹りはべりしも(難じる者も居ましたが)、さるべきにこそはあらめ(その女は、私とそういう仲になる運命の相手なのだからと)、誰れも心の寄る方のことは(誰にも女に気が向くということは)、さなむある(妻帯者にもあることだ)、と思ひたまへなしつつ(と非難を気にせず)、なほ時々見たまへしを(さらに時々会いに行っていました)、\*所のさがにやと(その山里の地名が「宇治(うち)」の所為なのか、女に先立たれて)、心憂く思ひたまへなりにし後は(心憂しく存じられましてからは)、道も遥けき心地しはべりて(足が遠退きまして)、久しうものしはべらぬを(久しく出向きませんでした)、先つころ、\*もののたよりにまかりて(先だつて一周忌法要に行つてきました)、はかなき世のありさまとり重ねて思ひたまへしに(女のはかない一生に無常の世を改めて感じまして)、ことさら道心起こすべく造りおきたりける(かの地は特に私の為(に)道心を起こさせるように造られた)、聖の住処となむおぼえはべりし(修行の場所かと思えました)」 \*「ところのさがにや」は注に<宇治の地名は「憂し」に通じる。>とある。洒落語用らしいが、中身は二人の女の死という重たいものではある。差し当たつて、中宮も表立った事情は知っている、と大将は思っている、こういう言い方で話が通る、と思つたらしい。が、中宮は、大将が思っている以上に、三の宮との三角関係という詳しい事情を知つていたし、さらに横川僧都の話から、実はその失踪した女は生きていたらしい、という薫殿や三の宮さえ知らない事情にまで接していた。こういう場面は読者にとって非常に緊迫感がある見所なのだろう。 \*「もののたより」は<ものついで=ちょっとした用件>のように聞こえがちだが、「もの」には<然るべき物事=大事な用件>をいう語用もあつて、此処では正に<一周忌法要>を暗示ではなく明示した言い方なのだろう。

と啓したまふに(と申し上げなされると)、かのこと思し出でて(中宮は、昨年の秋九月の女一の宮の病氣回復祈願の際に横川僧都が語つた話を、思い出しなされて)、いといとほしければ、(弟の大将がとても不憫だったので)

「そこには、恐ろしき物や住むらむ(其処には魔物が棲んでいるのではありませんか)。いかやうにてか(どのようにして)、かの人は亡くなりし(その人は亡くなったのですか)」

と問はせたまふを(とお訊きなさるのを)、「なほ、続きを思し寄る方(やはり姉宮は女の連続死を不審に思っいらっしやる)」と思ひて(と薫大将は思って)、

「さもはべらむ(そうかもしれません)。さやうの人離れたる所は(あのように人里離れた所には)、よからぬものなむかならず住みつきはべるを(よからぬものが必ず棲み着きますので)。亡せはべりにしさまもなむ(亡くなり方も)、いとあやしくはべる(非常に変でした)」

とて、詳しくは聞こえたまはず(と言って詳しくは申しなさいませぬ)。

「\*なほ(私が僧都の話をお聞かせ申したら、やはりこの乙人は)、かく忍ぶる筋を(せつかく隠していた倅宮との三角関係を)、聞きあらはしけり(私が知っていたのか)」と思ひたまはむが(と大将がお思いになるのが)、いとほしく思され(中宮はとてもいたわしく思われなさり)、宮の(兵部卿宮が)、ものをのみ思して(物思いに沈んで)、そのころは病になりたまひしを(その当時に病気になっていらっしやったのを)、思し合はするにも(思い合わせなさるにつけても)、さすがに心苦しうて(どうにも気が重く)、「かたがたに口入れにくき人の上(弟にも倅にも口出しし難いこの女の話であるものだ)」と思し止めつ(とお思いになって、中宮は大将に僧都の話をお話しなさいませぬでした)。 \*「なほかくしのぶるすぢを〜」は注にく中宮の心遣い。「忍ぶる筋」の主語は薫。「聞きあらはしてけり」の主語は中宮。>とある。さて、「忍ぶる筋」の中身はと言うと、弟大将と倅兵部卿とその女との三角関係、というところになりそうだ。となると、「なほ」は何を受けるのか。それは中宮が横川僧都の話を大将にするにあたっては、女が失踪した理由が三角関係にあったということ、中宮が知っていなければ、僧都の話の女を失踪した者と思ひ当たる手掛かりが無い、という事情を認識している、からこそ中宮の懸念だ。ただ逆に、女の失踪を通り一遍に病死と聞かされていただけなら、中宮は気楽に大将には無関係の雑談として、大将に僧都の話を聞かせていたのかもしれない。そして、大将は驚愕する、みたいだ。この辺の機微を当時の読者はスリリングに楽しんだのかもしれない。

小宰相に、忍びて(しかし中宮は、小宰相君にはそつと)、

「大将、かの人のことを(大将が、かの女のことを)、いとあはれと思ひてのたまひしに(とても悲しく思って仰っていたのが)、いとほしうて(可哀想なので)、うち出でつべかりしかど(横川僧都の御話を仕掛けそうになりましたが)、それにもあらざらむものゆゑと(それとはっきりしてもいないものと)、つつましうてなむ(言い出し兼ねました)。

君ぞ(あなたは)、\*ことごと聞き合はせける(山荘の者に知り合いが居るようなので、いろいろ聞き合わせて、詳しい事情を知っているでしょう)。\*かたはならむことはとり隠して(煩わしい話は伏せたまま)、さることなむありけると(こういう話もあるようだ)、おほかたの物語のついでに(それとなく)、僧都の言ひしことを語れ(僧都の言っていた事を大将に聞かせなさい)」 \*「ことごと聞き合はせける」は、小宰相が実家に入出入りする山荘の下僕から詳しい事情を聞き知っている、という事(蜻蛉巻五章七段)を踏まえているのだろう。 \*「かたはならむこと」の中身は人によってそれぞれ違ふだろうから、読者としては、話し手の中宮と聞き手の小宰相のそれぞれの思惑を見比べる事になる。中宮にとっての<不都合なこと>は<三角関係のこと>であり、それを<中宮が知っている事

を大将や兵部卿に知られること>のようだ。小宰相にとっての<不都合な事>は、実は<常陸女が生きること>それ自体かもしれないが、それを言わないとすれば、心情としては<大将が悲しむこと=常陸女の出家>あたりだとしても、それは隠せることでもなさそうだし、女房の立場としては主人筋の意向を汲むのだから、結局は<不都合な事=中宮の意向に反すること>なので<小宰相の思惑=中宮の思惑>ということになりそうだ。

とのたまはす(と仰せ付けになります)。

「御前にだにつつませたまはむことを(御前様でさえ遠慮なさいました事を)、まして、異人はいかでか(まして他人の私がどうしてお話し申せましょう)」

と聞こえさすれど(と小宰相は申し上げるが)、

「さまざまなることにこそ(だからあなたに頼むのです)。また(この件については)、まろはいとほしきことぞあるや(私では差し障りがありますから)」

とのたまはするも(と中宮が仰せになるにつけても)、心得て(小宰相は三角関係の事情を心得て)、をかしと見たてまつる(中宮の複雑な立場を察し申し上げます)。

[第六段 小宰相、薫に僧都の話語る]

\*立ち寄りて物語などしたまふついでに(薫大将が小宰相君の部屋に立ち寄ってお話しなさる時に)、言ひ出でたり(小宰相は横川僧都の話を言い出しました)。\*「たちよりて」の主語は薫大将らしい。こういう場面転換での実際の推移はいつも気になる。話の流れから私が受ける印象では、先に大将が中宮の御前を辞して小宰相君の廊下部屋で待っていた、ように思えるが、どうなんだろう。

珍かにあやしと(意外な不思議な話と)、いかでか驚かれたまはざらむ(大将はどうして驚きなさらないことがあるだろう)。「宮の問はせたまひしも(中宮が、宇治山荘に魔物が居るのではないかと、お尋ねになったのも)、かかることを、ほの思し寄りてなりけり(このことを念頭に仰ったものらしい)。などか、のたまはせ果つまじき(ならば、どうしてそのようにお話しくださらなかったのか)」とつらけれど(と水臭く思えたが)、

「我もまた初めよりありしさまのこと\*聞こえそめざりしかば(私自身もまた初めからは姫が悶心入水とは聞かされていなかったの)、聞きて後も(その話を聞いた後も)、なほをこがましき心地して(どうも奇異な気がして)、人にすべて漏らさぬを(誰にも全ては話していないが)、なかなか他には聞こゆることもあらむかし(さすがにそういう噂は外に漏れるものらしい)。\*うつつの人びとのなかに\*忍ぶることだに(世間の中に秘密を隠し通すのは)、隠れある世の中かは(出来ないということだろうか)」\*「聞こえ初めざりし」は薫大将の心中文なので<奉る>が無い敬語遣いの軽さからだけでは、薫殿が中宮に<申さなかった>のか、薫殿が<聞いていなかった>のか、の文意が紛らわしいが、下に「聞きて後も」という対比があるので、是が薫殿が<初めは聞いて

ていなかった>という文意だと分かる。薫殿は当初、姫が急な病死で穢れを畏れて簡素に直ぐ茶毘に付された、と地侍から聞かされていた。 \*「うつつのひとびと」は<世を映す人たち=世間>という言い方らしい。 \*「忍ぶることだに隠れある」は負数を負表示すると整数に見えるみたいなことだろうか。この言い方は、聞く分には文字で見るほどややこしくはないのかもしれない。

など思ひて(などと考えて)、この人にも(薫大将はこの小宰相にも)、「さなむありし(実はこうだった)」など、\*明かしたまはむことは(と、込み入った事情を打ち明けなさろうとは、思うものの)、なほ口重き心地して(やはり言い出し難く)、 \*「あかしたまはむことは」が「口重し」では、「などおもひて」からの論理構文が成立しない。「など」に代入された上文の論旨は<どうせ秘密は守れない>だから、「明かしたまはむ」という判断は正であって、それを「口重し」という負の行動に結び付けるには、両者の間を反転接続させなければならない。で、「思へど」を差し挟む。

「なほ(それはまた)、\*あやしと思ひし人のことに(不審死をしたと思っていた宇治の女のことに)、似てもありける人のありさまかな(よく似た人の話ですね)。さて(それで)、その人は、なほあらむや(その人はまだ生きていますか)」 \*「あやし」とはどういう認識か。薫殿の認識では<姫は恐らく入水した、が、遺体は見つかっていない>あたりで、小宰相君自身の認識も同じだろうが、薫殿が推量する小宰相君の認識は<宇治の人は不審な病死だった>というものだったのではないか。しかし今日の話で、小宰相君ばかりか中宮までが<宇治の女は病死ではなく煩悶入水したらしく、しかし遺体は上がっていないので、実際は失踪状態だ>という事情を知っているらしい、と薫殿は気付いたようでもあるが、それでも薫殿自身からその事情を打ち明けてはいないのだから、薫殿の姿勢としては<小宰相は宇治の女を病死と思っている>ものとして、取り敢えずは話を進める、ということになるのだろう。となると、「似てもありける」ということは<他人の空似>かく生まれ変わり>くらいの言い方になるのだろうか。小宰相自身は<宇治の女は死に切れずに正気を失って、何かの縁で横川僧都一行に助けられたのだろう>くらいに思っていたらうし、薫殿も正に左様に考えているのだろうが、其処まで平場で語り合える間柄にこの二人の立場は無いのだろう。

とのたまへば(と仰ると)、

「かの僧都の山より出でし日なむ(横川僧都が山から出て来た日に)、尼になしつる(尼にした、とのことです)。いみじうわづらひしほどにも(体調が非常に悪かったので、その間は)、見る人惜しみてせさせざりしを(世話している妹尼君が若さを惜しんでさせなかったものを)、正身の本意深きよしを言ひてなりぬる(本人が出家の意志の深い理由を言ってなってしまう)、とこそはべるなりしか(とのことでした)」

と言ふ(と小宰相は言います)。

所も変はらず(宇治山荘と宇治院の近さに)、そのころのありさまと思ひあはするに(日付も符合し事情も一致するので)、違ふふしなければ(その出家したという女が常陸女に間違い無いので)、

「まことにそれと尋ね出でたらむ(実際に本人確認が出来た時は)、いとあさましき心地もすべきかな(その尼僧姿にすっかり気落ちするのだろうか)。いかでかは、たしかに聞くべき(どうしても確かめなければならない)。下り立ちて尋ねありかむも(私自身で訪ねて行くのも)、かたくなしなどや人言ひなさむ(みっともないと人が言いそうだ)。また、かの宮も聞きつけたまへらむには(また、兵部卿宮も聞きつけなさったなら)、かならず思し出でて(必ずお出向きなさって)、思ひ入りにけむ道も妨げたまひてむかし(女が決心して入った仏道もお許しなさらぬことだろう)。

さて(いや、むしろ既に、このことを聞き知りなさっていて)、『さなのたまひそ(私には仰るな)』など聞こえおきたまひければや(と兵部卿宮が申し置きなさっていたので)、我には(中宮は私には)、さることなむ聞きしと(こういう話を聞いたと)、さる珍しきことを聞こし召しながら(横川僧都から珍しい話をお聞きなさっていらっしやりながら)、のたまはせぬにやありけむ(仰らなかつたのかもしれない)。宮もかかづらひたまふにては(甥宮も関わっていらっしやる女であってみれば)、いみじうあはれと思ひながらも(非常に愛しくは思うものの)、さらに(今さら)、やがて亡せにしものと思ひなしてを止みなむ(あのまま亡くなってしまったものと思ひ込んで諦めよう)。

\*うつし人になりて(生きていたのだから)、\*末の世には(晩年には)、\*黄なる泉のほとりばかりを(仏道談義を)、おのづから語らひ寄る風の紛れもありなむ(自然に語り合うような機会もいつかはあるのだろう)。我がものに取り返し見むの心地(自分のものに取り返して一緒に暮らそうという気持ちは)、また使はじ(もう持つまい) \*「うつしびと」は出家者に対して<世俗の人>という語用と、死者に対して<生存している人>という語用があるらしく、此处では後者。 \*「すゑのよ」は<後世・来世>と<晩年>の語用があり、此处では後者。 \*「きなるいづみ」は「黄泉(よみ)」の漢字表記をわざわざ訓読みしたものらしい。が、ウィキペディアなどによると、「ヨミ」は元々和語で<死者の世界(闇の世界)>をいう語で、その意味の漢語が「黄泉(こうせん)」なので、「黄泉」を「ヨミ」と読む、ということらしい。ちょっと空回り気味だ。薫大将が無理やり納得しようとしている、ということを示す筆致だろうか。

など思ひ乱れて(と薫大将は思い乱れて)、「なほ(やはり中宮は)、のたまはずやあらむ(お話しにならないかもしれない)」とおぼゆれど(と思えたが)、\*御けしきのゆかしければ(中宮のお考えが知れたかったので)、\*大宮に(御所の御座所に)、さるべきついで作り出だしてぞ(公務の相談事があるとして)、啓したまふ(改まって申し上げます)。 \*「みけしき」の「御」は中宮に対する敬称だろうから、この「みけしき」は<中宮の、大将と兵部卿と宇治女の三角関係に対する認識とおよその意向>なのだろう。 \*「おほみや」は明石中宮のことだろうし、雪の日の別れがあった明石姫が「大宮」と呼ばれるようになったとは感慨深いだが、此处では「さるべきついで作り出だしてぞ」とあるので、薫大将が六条院の姉君を見舞うなら特に「ついで(表立った用件)」は不要だろうから、この「大宮」は中宮自身を指す語用というよりは<御所の皇后室>のことを言っている、と読んで置く。この大将の計らいを公私混同とする見方も出来るが、薫大将が常陸女に関わる際に、兵部卿及び中宮の意向を確かめておくことは、一家庭内の不和に止まらず、権勢家の混乱に乗じて勢力拡大を図ろうとする外部一族は必ず居るので、実

質での政情安定を期した秩序の乱れを避ける重要な事柄だ、とも言えるのかもしれない。まあ、薫殿の狙いが匂宮への釘刺しであることは明白だが。

[第七段 薫、明石中宮に對面し、横川に赴く]

「あさましようて(余りに急な事で)、失ひはべりぬと思ひたまへし人(亡くしてしまっただと思っておりました女が)、世に落ちあぶれてあるやうに(身分の無い立場で世を流浪しているやうに)、\*人のまねびはべりしかな(知らせる人がありました)。 \*「ひと」は小宰相で、当の中宮が小宰相から大将に話すやうに仕向けたのであり、そういう事情も承知の上で、大将はこういう言い方をするし、中宮も大将が事情を承知の上で話して居ることを承知している、という場面。

いかでか、さることははべらむ(どうしてそんなことがあろうか)、と思ひたまふれど(と思ひ申しながらも)、\*心と\*おどろおどろし(自分から進んで入水などと言うとんでもないことで)、もて離るることははべらずや(離れて行くようなことはないだろう)、と思ひわたりはべる人のありさまにはべれば(と、ずっと思っていた女の気弱な性格だったので)、\*人の語りはべしやうにては(事情を知る人が話す所では、助けられた女は正体も無く物の怪に取り憑かれていたということです)、さるやうもやはべらむと(そういうことなら入水を図って失踪したということも有り得るか)、似つかはしく思ひたまへらるる(それが居なくなった女のことも思え申ししております)」 \*「心と」は<我が心として=自分から進んで>。 \*「おどろおどろし」は<異様だ>で、常陸女の常軌を外れた<入水自決>のことを言っているらしいが、「おどろおどろし」に<入水>の語意は無いので、聞き手が<入水>事実を知っている前提で、この「おどろおどろし」が<入水のことを言っている>と察せられる訳で、是はカマを掛けた言い方ではなく、小宰相の話から中宮も詳しい事情を知っていると、大将は分かった上で其と明示した上品な言い方をしている、と読んで、言い換え文では明示する。 \*「人」は横川僧都なのだろう。「かたりはべしやう」とは<宇治院で発見した時に物の怪に取り憑かれて正体不明だった=自分の意志で入水を図ったのではなく、物の怪に惑わされた>と読んで置く。

とて、今すこし聞こえ出でたまふ(と大将は、以前よりは少し詳しくお話し申しなさいます)。宮の御ことを(兵部卿宮についての御話を)、いと\*恥づかしげに(大将はとても言い難そうに)、さすがに恨みたるさまには言ひなしたまはで(といっても宮を非難するような言い方はなさらずに)、 \*「はづかしげ」は<恥づかしそう=極まり悪そう=言い難そう>という語用と<周りが緊張するほど立派だ、優れている>という語用がある、とのように古語辞典にある。此处では下の発言文の内容からして前者だろう。

「かのこと(この女の話)、またさなむと聞きつけたまへらば(兵部卿宮がまたそういう話があるのかと聞きつけなされば)、かたくなに好き好きしうも思されぬ\*べし(非常に強く遊び相手として興味をお持ちになるでしょうから)、さらに(私は一切)、さてありけりとも(そのような女が居たとしても)、知らず顔にて過ぐしはべりなむ(知らぬ顔をして過ぐして行きます)」 \*「べし」は終止形だが、是は「聞きつけたまへらば」という条件項を受けて、その推移・



傾向説明を示す助動詞語用なので、例えばくにて>くらいが省かれた言い方であり、此処は文末ではなく、読点で下に続く構文と見るべき、かと思う。

と啓したまへば(と申し上げなさんと)、

「僧都の語りしに(僧都がその話をしたのは)、いとの恐ろしかりし夜のことにて(とても不穏な風向きの夜のことでしたので)、耳も止めざりしことにこそ(よく覚えていません)。宮は、いかでか聞きたまはむ(三の宮はお聞きになっていません)。

聞こえむ方なかりける御心のほどかな(言葉も無い情けないお考えだ)、と聞けば(と今のあなたの御話で宮の御暮らしぶりを聞けば)、まして聞きつけたまはむこそ(ましてこの話を宮が聞きつけなさんのは)、いと苦しかるべけれ(本当に困ります)。かかる筋につけて(そうした男女関係で)、いと軽く憂きものにのみ(軽薄な浮気者とだけ)、世に知られたまひぬめれば(世間に知られていらっしゃるようなので)、心憂く(心配です)」

などのたまはす(と中宮は仰います)。「いと重き御心なれば(中宮はとても慎重な方なので)、かならずしも(必ずや)、うちとけ世語りにて(気安い世間話であっても)、人の忍びて啓しけむことを(誰かが内緒にお聞かせ申した話を)、漏らさせたまはじ(他言なさんことはない)」など思す(と大將は思いなさいます)。

「住むらむ山里はいづこにかはあらむ(女が住んでいるという山里はどこなのだろう)。いかにして、\*さま悪しからず尋ね寄らむ(何とか目立たずに探して近付きたい)。僧都に会ひてこそは(やはり僧都に会って)、たしかなるありさまも聞き合はせなどして(はっきりした話を聞いて)、ともかくも問ふべかめれ(詳しく尋ねるしかないだろう)」など(と薫大將は)、ただ、このことを起き臥し思す(ただこのことばかりを毎日考えなさいます)。 \*「様悪し」はく見苦しい。体裁が悪い。>と古語辞典にある。何のことを言っているのか分かり難いが、下文からすると、どうやら大將は人目に付くのを避けたかったようなので、いっそ左様に明示して置く。

\*月ごとの八日は(毎月八日は)、かならず尊きわざせさせたまへば(薫大將は必ず寺社参拝をなさっていたので)、薬師仏に寄せたてまつるにもてなしたまへるたよりに(薬師如来に御寄進なさるために)、\*中堂に(比叡山延暦寺の根本中堂に)、時々参りたまひけり(時々お詣りなさっていました)。それよりやがて横川におはせむと思して(その際にそのまま横川にいらっしゃろうとお考えになって)、かのせうとの童なる(常陸女の弟の童子を)、\*率ておはす(連れてお出掛けなさいます)。 \*「つきごとのやうかは」は注に<毎月八日は、六斎日の初日。薬師仏の縁日。>とある。六斎日(ろくさいにち)は<『仏』 一か月のうち在家の者が八戒を守るべき 8日・14日・15日・23日・29日・30日をいう。この日に四天王が人間の行為を観察するという説と、悪鬼が観察するという説がある。六施日。>と大辞林にある。八戒(はっかい)は<八斎戒とも。仏教で在家の男女が一日だけ守る戒。出家生活の清浄を体験するために設けられたもの。一日戒とも。不殺生、不偷盗(ちゅうとう)、不邪淫(じゃいん)、不妄語(もうご)、不飲酒(おんじゅ)の五戒に、装身具・化粧をやめ歌舞を視聴しない、高く広い寝台に寝ない、昼食以後食事をしない、の三戒を加える。 >と『百科事典マイペディア』にある。薬師

如来は医薬利益。縁日は参詣日。 \*「ちゅうだう」は注に<比叡山延暦寺の根本中堂。本尊は薬師仏。>とある。 \*「あておはす」の日付に付いて、注には<『集成』は「すでに叡山に向け出立の体。五月の月末に近い頃かと思われる」と注す。>とある。一周忌法要の後のことなので、四月以降の夏の話とは思いますが、「月ごとの八日は」とあったので、仮に五月なら<五月八日>かと思うが、「月末に近い頃」というのは後述があるのだろうか。分かり難い注だ。

\*その人びとには(その童子の家族である常陸守家の人々には)、「とみに知らせじ(まだこのことは知らせずに置こう)。ありさまにぞ従はむ(本人の様子を見てからだ)」と思せど(と大将は事前にお思いになっていたが)、うち見む夢の心地にも(再会できるという夢心地の中にも)、あはれをも加へむとにやありけむ(弟を連れて行くことで、常陸女の同情を買う計算があったのかもかもしれません)。 \*「そのひとびと」は注に<浮舟の家族をさす。>とある。「その」は<その童子の>という言い方なのだろう。だとしたら、この「その」は地文になる、かと思う。

さすがに(このように手筈を整えた心算の大将だったが)、「その人とは見つけながら(その女が常陸女と分かっても)、あやしきさまに、形異なる人の中にて(異形の尼僧の中に居て)、\*憂きことを聞きつけたらむこそ(卑しい者に汚されたことから救われるための出家だと聞かされるとしたら)、いみじかるべけれ(非常に残念だ)」と、よろづに道すがら思し乱れけるにや(と、いろいろな可能性を考えて単純な浮かれ気分でもなかったそう)。 \*「うきこと」は注に<『集成』は「失踪後、何か男関係でもあったというようなこと」と注す。>とある。私は、全く個人的な空想だが、もし出家に合理性があるとしたら、基本的には身分を守るための方便に過ぎないと思うものの、この強姦された女の救済方としてだけは、実質の有効性があるような気がする。

(2014年2月26日、読了)